中経論壇

経営支援NPOクラブ理事
吉田　仁

多様性が共存する社会を

屋台大学に参加して

「おもしろきこともなき世をおもしろく」と高杉晋作は詠んだが、心の持ち方次第だというだけではなく、実際、世間には面白いことを創造する人がいる。その人たちは時として、奇人・変人と呼ばれることが多いようだ。しかし、違った考え、異なる性格の人がいるから、社会は進歩し発展すると歴史は教えてくれる。そんなことをあらためて考える機会があった。

昨年12月、内田洋行が主催する「屋台大学」に参加した。これは、同社が社会活動として、終業後に実施しているもので、自ら面白い人間と認識している人なら誰でも受け入れている。従って、互いに全く知らない人が集まる。毎回ユニークな講師を招き、80人ほどの参加者が、1時間半ほどの講演を聞き、その後有志で懇親会を行う。12月の講師は、映像監督の江口カン氏であった。映像表現にあたって、構想する苦労話と撮影の裏話などを生で聞くことができ、大変面白かった。世の中には、すごい人たちがいるものだとあらためて感じた。

ネクタイ姿のサラリーマンの枠にとらわれない、自由さと破天荒さが充満し、終始、熱気に包まれた会であった。さすがに内田洋行という企業には、多様性を重んじる素晴らしい社風があり、その懐の深さに感心したのだが、実は、この活動は、社内的には認知されていないのだという。会社施設を利用して、複数の社員が運営しているのだから、大きな意味では、会社として許容しているのだろうが、主催の責任者は、社内の冷たい視線を浴びながら、それをものともせず、信念にしたがって継続しているという。これまた、すごいことだと思った。

大学生に対するアンケートで、明るく自由闊達（かったつ）な社風であることが、就職したい会社の理由のトップに挙げられている。いろいろなタイプの社員がいて、自由な議論ができ、楽しく働けることが理想である。屋台大学に集まった自ら奇人・変人を称する人のなんと明るいことか。同じようなDNAを持った社員の集まりでは、効率は良くても、変化に対応した発展は見込めないと思う。毛色の変わった社員の存在は、企業の柔軟性と活力の表れである。

社会も多様性を否定すると悲惨な状況を生み出す。中東や、国内で起きた事件が如実に物語っている。どんな組織においても、多様性の共存が大切であることを、改めて思い起こさせた会であった。私は、今回が2回目の参加であったが、ぜひとも、長く続けられることを期待したい。